33 ファルケ 『文化民族の服装史』377の挿図と色刷り口絵1枚付き

Falke, Jacob von. Costümgeschichte der Culturvölker mitt 377 Abbildungen in Text und einer Farbendrucktafel. Stuttgart, W. Spemann, [1881] 480p. with illus. 28.9×19.8 cm
〈383.1-F〉
Hiler p. 302 Colas 1029 Lipp. 88

西洋服装史がようやく体系的な整いを見せてくるのは，ヨーロッパでも19世紀の60年代から80年代にかけてのことで，ティルケが指摘したように，その最初の基礎を築くことになるのがヴァイスの『服装学』Kostümkunde, 1860—1872 (**30**) であった。彼はこの中で，衣服を文化生活と関連づけてとらえることを説いた。クレッチマー (Albert Kretschmer) の色刷り石版画とロールバッハ (Carl Rohrbach) のテキストによる『諸国民の服装』Die Trachten der Völker, 1860—1864 (**87**) が刊行されたのもこれと平行してであり，その約10年後にはケーラー (Karl Köhler) の『中世・近代間のドイツ服装の発展』Die Entwickelung der Trach in Deutschland ……, 1877 (**32**) が，また更に10年後の80年代にはファルケの本書及びホッテンロート (Friedrich Hottenroth) の『古代及び現代諸国民の服装・軍服・装身具・・・』Le costume, les armes, les bijoux, la céramique, 1886—1891 (**37**)，続いてはラシネ (Auguste Racinet) の『服装史』Le costume historique, 1876—1888 (**35**) が完結してこの分野での黄金時代を現出した。

ファルケの本書は，こうした歴史的経緯の中に誕生したが，彼は序及び緒論において次のようなことを述べている。すなわち，服装史は今日，かつて経験しなかったほど人々の関心事となっている。……そのための服装に関する書物が続々あらわれてきたが，これは余りに画家の視点に立ちすぎたり，余りに広範囲にわたりすぎたり，色彩が豊かなために高価でありすぎたりで，興味をもつ人が簡単に手にすることも難しい。……手ごろで挿図も範囲も適当な概説書を意図したのが『文化民族の服装史』である。服装史は，物好きで奇をてらった歴史であったり，逸話集であったり，単に偶発的な要素をもつものだ，と考えられているのは誤りで，そうした精神を忘れた非科学的な方法は避け，一つの文化史として，原因と結果，生成と衰退の法則の発見がなければならない……と。第Ⅰ部は古代の服装，第Ⅱ部は中世，第Ⅲ部は近代。第1章宗教改革時代の服装，第2章16世紀後半・スペインの風俗服装と流行，第3章30年戦争時代の衣服，第4章奢侈な仮髪時代の服装，第5章フランス革命時代の服装，第6章近代の軍服，第7章19世紀の流行，となっている。

文化史家ファルケ (1825—1897) はプロイセンのラッツェブルク生まれで，兄に歴史家 J. F. G. ファルケがいる。(石山)